

(5) 淡水魚類

レッドリストに掲載された各淡水魚類について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（淡水魚類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—（脊椎動物編）」（環境省編,1993）を基に、新しい知見を加え整理した。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「汽水・淡水魚類レッドリスト」（環境省,2007）の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—（脊椎動物編）」（環境省編,1993）を基に、新しい知見を加え整理した。一部の異名は和名の後の（ ）内に記述した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。なお、「レッドデータブックあいち 2002 動物編」では、県内分布図を掲載したが、本書では掲載種の保護の観点から分布図は掲載しなかった。

【生息地の環境 / 生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【 淡水魚類 執筆者 】

駒田格知

【 淡水魚類 調査協力者 】

次の方々に現地調査、標本提供、資料参照等で協力していただいた。

石川美佐子 大仲知樹 高田 誠 村瀬温子 山上将史 山田久美子 渡辺美咲
(敬称略)

ウシモツゴ *Pseudorasbora pumila* subsp.**【選定理由】**

生息の知られている全ての池や河川でその生息条件が著しく悪化し、さらに採取圧も加わって個体数も個体群数も危機的水準にまで減少している。

【形態】

全長約 7cm の小型の魚。体は黄褐色～褐色を呈し、側線は不完全である。県内にはよく似たモツゴが多く生息するが、本種は頭部が大きくてモツゴよりも寸詰まりの感があり、区別される。

【分布の概要】**【県内の分布】**

豊田市や名古屋市近郊の一部の沼や池に生息している。しかし、数年前に生息が確認されたという情報のあった池でも、今回の調査では確認されなかった池が多く、極めて変動の多い魚である。さらに、モツゴとの混在もあって、安定した生息状況はあまり認められない。

【国内の分布】

日本固有種。岐阜県と愛知県にまたがる濃尾平野の一部に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

池や沼、それに続いているほとんど流れのない用水路、小川の止水域に生息する。池は水深 1.0～1.5m で深く、底質は泥で、茶色に濁った水で、木の破片や水草が繁茂して身を潜めることの出来る場所に好んで生息する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

農業用水路や溜め池の改修、農地整理等によって生息環境が著しく消失している。さらに、生息水域にモツゴが新たに進入することによって競争がおこり、個体数の減少につながっているとも言われる。同じ生息地で長期間（5年以上）確認された例は少なく、環境変化に敏感で、個体数の変動が大きいと思われる。

【保全上の留意点】

生息地が改変される場合には、一時的に保護し、改変後に戻すような配慮が必要と思われる。水辺に水草などを植えるようにして、生息できる環境作りをする。また、観察や調査活動によって減少することが言われており、人の近づかない生息地の造成の配慮が必要とも思われる。特に、アマチュアの採集者の行為は慎まなければ、本種にとって生息を続けることは困難であろう。

【特記事項】

環境省レッドリストの絶滅危惧 I A 類。

同じ水域での生息確認が長期間（5～10年）に及ぶことが比較的少ない。

イタセンバラ *Acheilognathus longipinnis* Regan**【選定理由】**

現在まで生息の知られていた全ての場所で生息条件が著しく悪化しており、今回の調査ではそのような場所では採捕確認されておらず、その個体数および個体群数が危機的水準にまで減少している。

【形態】

全長 10cm のやや大型のタナゴ類。体は著しく薄く側扁して体高が高く、名称はこのことに由来していると言われる。体は褐色を帯び、背ビレおよび尻ビレの鰭条数は 14~16、13~16 で多いため全体としてヒレが巨大にみえる。

【分布の概要】**【県内の分布】**

従来 (20 年程前) は県内の木曾川下流域の淀みや小川にかなりの生息がみられたが、最近ではごく限られた場所でのみしか確認されていない。日進市で採捕確認されたが、その後人為的に採捕されたために姿が見られなくなった。なお、これらは放流されたものとも言われている。

【国内の分布】

日本固有種。濃尾平野、淀川水系および富山平野に分布していたが、最近はさらにその分布域は限定されている。

【生息地の環境 / 生態的特性】

水生植物の繁茂している流れの緩やかな水域または河川のワンド等に生息する。産卵は 9 月~11 月頃にイシガイやドブガイ等に行われ、稚魚は 6 月頃に岸近くの植生帯に出現し、数尾ずつ群れるが、まもなく深層に移動して姿が見られなくなる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

従来報告されている木曾川下流域およびその周辺の池や小川等で何年かに一度採捕確認されたという報告があるが、その分布は著しく限定され、少ないものと思われる。かなり以前に日進市の周辺から隔離され、底質が泥のヨシ帯が茂る池に 6 月頃稚魚の生息が、また周囲の小川に成魚の生息が確認された。その後、これらは人の手によって採捕され姿を消した。人による採捕や生息場所の消失が、減少の主要な原因と思われるが、本種の生息場所はオオクチバス (ブラックバス) やブルーギル等の外来魚が好んで生息する場所であり、これらによる捕食活動も減少の原因と考えられる。

実際には様々な意図があって、観察や調査が行われているものと思われるが、それに関わる行為は本種にとって著しく悪い影響を及ぼしている。留意しなければならない。

【保全上の留意点】

ワンド、池等に水草帯を確保し、産卵母貝であるイシガイ類の生息が可能となる環境をつくる。また、人による採捕の禁止の徹底は言うまでもないが、外来魚 (オオクチバス、ブルーギル) の放流は厳に慎みたい。

【特記事項】

国指定天然記念物、環境省レッドリストの絶滅危惧 I A 類。

従来から確認・報告のみられた木曾川水系ではこの数年間確認されておらず、今回の調査でも確認されなかった。

ネコギギ *Coreobagrus ichikawai* Okada et Kubota

【選定理由】

現在までに知られている全ての生息地で、その生息条件が著しく悪化しつつあり、個体数が危機的水準にまで減少している。

【形態】

体長 7~8cm で、ギギ科魚類の中では最も小型である。頭部は丸みを帯び、尾ビレの後縁の切れ込みは浅い。体色は黄褐色の地に暗褐色の大きな斑点が、背ビレ、脂ビレの下部および尾柄部に存在する。

【分布の概要】

【県内の分布】

矢作川水系および豊川水系の中流域に、個体数は少ないが点在している。移動範囲はあまり広くなく、ほぼ限定された場所に長期間にわたり生息している。

【国内の分布】

日本固有種。伊勢湾および三河湾に注ぐ東海地方の大~小河川の中流域に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

水深 50cm 以上のやや流れの緩やかな浮き石の下や、大きな岩石の陰、ヨシ帯等の隙間を中心に生息している。餌は主として底生動物で、水生昆虫を好んで食べる。行動は夜間が主であるが、昼間も岩の下をゆっくりと移動するのが観察される。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

巨岩の陰や浮き石帯および、ヨシ帯の広がる場所に点在して生息するが、その個体数は少ない。夜間だけでなく昼間も活動し、その移動能力はゆっくりなために人によって簡単に採捕されるため、採集圧も重大な減少原因の一つである。また、河川の改修工事、護岸工事により一段と生息地域が限定され、さらに水質悪化も個体数の減少に深く関係している。

【保全上の留意点】

生息場所である浮き石帯やヨシ帯の保全に留意する。また、生活排水の流れ込み等による水質悪化の影響を受けやすいため極力防止に努める。特に、ダム建設や横断構築物の建設場所と生息域が合致することがあるため、一時的な保護行為も有効と思われるが、再放流の際には移動範囲の狭い種であるために、遺伝的要素にも充分留意しなければならないと思われる。

【特記事項】

国指定天然記念物、環境省レッドリストの絶滅危惧 I B 類。

スナヤツメ *Lampetra mitsukurii* Hatta**【選定理由】**

現在までに知られている大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつあり、生息場所の消失に伴って個体数が大幅に減少している。

【形態】

口は吸盤状で、顎（あご）を持たない。この吸盤上に角質から成る歯が存在するが、他のヤツメウナギに比べるとその発達は著しく不良である。眼の後方にあるエラ穴（7個）を眼と見立てて、合計8個でヤツメ（八眼）と呼ばれる。胸ビレも腹ビレも持たない。体長9～11cm程度で、成体では第一背鰭と第二背鰭が一続きである。

【分布の概要】**【県内の分布】**

木曾川（犬山市）水系や矢作川（岡崎市）水系の中・上流域およびその支流にわずかに点在してみられる。

【国内の分布】

北海道、本州、四国の全域と九州の鹿児島県、宮崎県以外の日本各地に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

一生を淡水域で生息する。河川の中・上流域の川岸の河床が砂、泥、さらに小枝や葉の堆積している場所、主として淀みに生息するが、水の澄んだ、湧水のある浅い細流の砂泥底にも好んで生息する。幼生はアンモテーススと呼ばれ、特に眼は皮下にあり、口は吸盤をなさず、泥底にもぐり、有機物を食して成長し、3～4年後に変態して成魚となる。成魚は産卵後死亡する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

生息の確認された場所でもその個体数は1～2尾程度で、生息量は極めて少ない。本来であれば、同一地点で夏季には成体に混じって幼体も多く見られるのであるが、今回の調査ではそのような場面はなかった。河川改修や周辺からの土砂の流入によって川が浅くなったり、淀みがなくなることによって、木・葉等の有機物や泥が溜まりにくくなり、幼生の生活に適した環境がなくなりつつある。一般的に我々が目にするのは、何らかの原因で出生地から下流へ流された個体が単独で採集される場合である。この場合、採集された場所は本種の再生産に関係はしていない。

【保全上の留意点】

河川改修や土地利用開発等の際に、湧水が止まったり、土砂が河川に流入するようなことのないように配慮し、淀みが形成され、河川水が汚染されることのないように配慮する。特に、河川の曲がった場所や巨石、木々による淀みは重要である。

【特記事項】

環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類。

幼体（アンモテースス）は、川の中流域の河床が木枝や葉等が腐敗したような泥で構成されている淀み等で生活し、泥中の有機物や藻類を食する生活を送る。

カワバタモロコ *Hemigrammocyppris rasborella* Fowler**【選定理由】**

現在までに知られている分布域の一部で生息条件が明らかに悪化し、個体数が減少しつつある。特に、池や沼に生息しているものは、オオクチバス（ブラックバス）やブルーギル等の外来魚の影響も直接受けている。

【形態】

体の側線は不完全で、ロヒゲを欠く。全長 3.5～6cm で、雄よりも雌の方が大型となる。産卵期を迎えると、雄は非常に鮮やかな黄金色を呈するようになる。

【分布の概要】**【県内の分布】**

尾張地方（犬山市、稲沢市、瀬戸市）、三河地方（岡崎市）等の山沿いの農業用の溜め池や細流に生息する。

【国内の分布】

日本の特産種。本州中部以西、四国の瀬戸内海側および九州北西部に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

平野部の浅い溜め池、小川、沼等に生息し、群れて生息する。雑食性であり、水草や木の葉が水中にあって、付着する藻類、特にアオミドロや水生昆虫の多く存在する場所を好む。生息の確認された場所は、湧水があるような古い池で水の環境がほぼ安定して、オオクチバスやブルーギルの放流されていない池沼に限られていた。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

山沿いの細流や平野部の湖池・溜め池に点々と生息している。やや流速のある用水路でも水草が茂ったり、魚溜まり区間をつくると、生息が可能となる。人の手の入らない水域では生息が期待できうるが、鑑賞魚として利用されることがあり、採集圧は水域の消失とともに減少の大きな要因となっている。

【保全上の留意点】

鑑賞魚としての利用が高まっているが、採捕は慎むべきである。また、本種の生息している場所が細流であったり、小さな池沼であることが多いため、開発等で消失することが多い。土地開発等の場合には生息場所が消失することのないように配慮する必要がある。さらに、肉食性の外来魚の放流は厳に慎むべきである。

【特記事項】

環境省レッドリストの絶滅危惧ⅠB類。

イチモンジタナゴ *Acheilognathus cyanostigma* Jordan et Fowler

【選定理由】

現在までに知られている大部分の生息地において生息条件が明らかに悪化しつつあり、個体数が大幅に減少している。産卵は二枚貝に行われるために、貝の生息環境の良し悪しの影響をも直接受ける。

【形態】

全長約 8cm で体高が低い。側線鱗の前から 6~7 枚目の鱗上方に大きな暗緑色の斑点があり、それに連続して太くて長い顕著な青緑色の条が尾ビレの基部まで走る。これがイチモンジ（一文字）タナゴの名の由来である。

【分布の概要】

【県内の分布】

木曾川下流域およびその支流である農業用水路等に分布している。

【国内の分布】

日本固有種。琵琶湖淀川水系、和歌山県紀ノ川水系、福井県三方湖および濃尾平野に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

平野部の小川、用水路さらに流れの緩やかな大河川やその淀みやワンドに生息する。泥底で水草帯に好んで生息し、石や草の付着藻類や底生の小動物を捕食する。産卵は 4~7 月にドブガイやイシガイ類に行われ、受精 2 日後に孵化し、約 1 ヶ月後に貝から出る。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

水生植物が繁茂し、泥底でやや大きな石も存在するようなワンドや用水路で、時として数尾~数十尾が群れて生息している。年によってその個体数に大きな変動がみられる。産卵母貝（二枚貝類）や稚魚の生息場所である水生植物帯の減少は大きな影響を与え、特に二枚貝の生息の確保が最も重要であろう。さらにオオクチバス（ブラックバス）やブルーギル等の捕食者の影響も大きい。

【保全上の留意点】

産卵母貝（イシガイ等の二枚貝）の繁殖や生育が十分に行われる場所が存在する事が重要である。孵化した稚魚の生息場所である水生植物帯の保全、またオオクチバスやブルーギル等の外来魚の放流や人による採捕は慎むべきである。

【特記事項】

環境省レッドリストの絶滅危惧ⅠA類。
鑑賞魚としての人気が高い。

ホトケドジョウ *Lefua echigonia* Jordan et Richardson

【選定理由】

現在までに知られている分布域の一部で生息条件が明らかに悪化しており、個体数が減少しつつある。里山地域での細流の護岸整備による影響を大きく受けている。

【形態】

全長 6cm 程度である。体は円筒状で、ドジョウのように細長くない。頭部は縦扁し、尾部は側扁する。上から見ると円形に近い。ヒゲは 4 対で、上唇に 3 対、1 対は鼻孔より発達したものである。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張地方や三河地方の山間地帯の細流を中心に全県に広く分布している。ただし、その生息地は著しく限定されている。

【国内の分布】

日本固有亜種。青森県、中国地方西部以外の本州および四国東部に広く分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

山間地帯や山すそを流れる細流、特に上流域に湧水があり、底質が泥や砂の場所に好んで生息する。やや深い池の岸等では、草の間の中層をフワッと浮いた状態で生活することもある。冬季にはそれらの池に入って越冬する。餌は浮遊性や底生性の小動物で、細流の小石や草木のたまったところに潜んでいることが多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

山間部の湧水を源とする細流に主として生息する。山すそを流れる細流や小川は、用水路整備の名目の下にその姿を変えることが多く、影響を受ける。三面張りの細流でも、段差があり、石や木々がたまってやや深い淀み（水深 30cm 程）が形成され、クレソン等の生える場所ではやや生息が確認される。しかし、これは自然の状態ではない。ゴルフ場の建設や宅地造成等に関連した生息場所の消失が、最も大きな減少要因である。

【保全上の留意点】

山間部・湧水帯の保全および細流の確保に努める。一般的に、人里離れた細流で生活しているために人目につかない反面、ゴルフ場の建設や土地開発で知らぬ間に生息場所がなくなっていることも多いため、事前に生息状況調査を実地して保全に留意すべきである。特に、防災上問題がなければ、生息場所の保全にも努めるべきである。この場合に最も大切なことは夏期でも水温の上昇しない湧水が近辺にあることである。

【特記事項】

環境省レッドリストの絶滅危惧ⅠB類。

ナガレホトケドジョウ *Lefua* sp.

【選定理由】

現在までに知られている分布域の一部において生息条件が明らかに悪化しており、生息個体数が減少している。活動範囲が限られているため、生活場所の消失により容易に減少する傾向にある。

【形態】

体長6cmの小型のドジョウ。ホトケドジョウに似るが、体がやや細長く、眼から口先にかけて黒線があることで区別される。

【分布の概要】

【県内の分布】

東三河地方の山間部の細流や里山の入口の沢に生息する。生息場所は点在しており、生息量は決して多くない。

【国内の分布】

近畿地方、愛知県・静岡県に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

河川の上・中流域の水のきれいな、河床に礫の多い細流や沢に生息する。近縁のホトケドジョウは、流れのほとんどない細流に生息するのに対して、本種は溪流性である。通常、沢や細流ごとに生息個体群が認められ、移動範囲の狭い種といわれる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

山間部の支流や沢で点々と生息が確認されている。流速がかなりみられ、頭大石がごろごろ存在する、いわゆる溪流の様相がみられるところに生息している。自然災害や、河川工事さらに砂防ダム建設や農地整理に伴う細流等の生息場所が消失することによって減少している。

【保全上の留意点】

河川改修やゴルフ場の建設の際には、事前に生息状況をよく調査して、沢が土砂で埋まったり、流路の変更等によって生息場所の消失のないように配慮する。特に、その生息している場所が局限されたり、悪化した場合でも、本種は生息場所から移動して危険を避けるようなことはあまりないと考えておくべきである。人による採取圧もあり、注意すべきである。

【特記事項】

近年、生活場所の違いや形態の差異等から、ホトケドジョウと区別されるようになった。生息自体が知られることなく、環境とともに消失してしまうことがある。

環境省レッドリストの絶滅危惧ⅠB類。

カジカ大卵型 *Cottus pollux* Guntherカジカ小卵型 *Cottus reinii* Hilgendorf**【選定理由】**

現在までに知られている分布域の一部において生息環境が悪化したり消失したりして、その個体数が著しく減少している。

【形態】

体長 15～17cm。体色は淡褐色から暗褐色まで差異に富み、体側に 4～5 個の暗色の斑がある。鰓蓋の後縁の棘は 1 本、口蓋骨歯も有さない。本種には生活型の異なる 2 つのタイプ、すなわち両側回遊型の小卵型と陸封型の大卵型がある。前者の胸鰭軟条数は 13～16、後者は 12～14 でやや異なる。

【分布の概要】**【県内の分布】**

大卵型は矢作川や豊川水系の上流域で、また小卵型は矢作川・豊川水系、さらに庄内川の中・下流域で確認されているが、その生息量は決して多くない。特に大卵型は少ないようである。

【国内の分布】

日本固有種。2 タイプともに本州と四国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

小卵型は河川の中・下流域に分布し、大卵型は上流域に生息する。小卵型は 2 月頃下流域で孵化し、孵化後河川を下り、海にて約 1 ヶ月生活した後、河川を遡上する。体長 15～20mm に達した稚魚は群れて遡上する。大卵型は上流域で孵化し、そこで生活を送る。両者とも、浮き石の下や草木の下に身を潜めて水生昆虫、流下昆虫等の小動物を食して成長する。小卵型は河口から数十 km まで遡上し、その上流側の大卵型とは棲み分けているようである。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

河川の上流域に生息する大卵型カジカは、稚魚期は溪流の岸側の浅い淀みで生活し、成長すると流れの中央部の浮き石の下に入り、移動しながら餌をとって生活する。中・下流域の小卵型カジカは、海から河川を遡上して同様の生活をする。また、小卵型は冬季に中流域で早瀬の浮き石帯に産卵し、大卵型は初夏に上流域の同様な場所で産卵する。このような産卵場所の減少は、カジカ自体の減少と直接関係する。

【保全上の留意点】

河川陸封型は、河川改修や山地開発等の影響を受けやすいため、産卵場や育成場所である浮き石帯の消失、特に、周辺からの土砂の流入のないように配慮すべきである。また回遊型は、堰の建設による移動の妨げや平瀬化等による生息場所の消失のないように心がけるべきである。

【特記事項】

大卵型は環境省レッドリストの準絶滅危惧、小卵型は絶滅危惧ⅠB類とされている。

小卵型（回遊型）は、海の沿岸から河川の中流域まで広い範囲が生活場所となるため、広域的な環境への配慮が望まれる。

カマキリ (アユカケ) *Cottus kazika* Jordan et Starks

【選定理由】

現在までに知られている分布域の一部において生息環境が悪化したり消失したりして、その個体数が著しく減少している。特に大河川を遡上するため、広範囲の環境変化の影響を受ける。

【形態】

体長 20cm に達するカジカの仲間。体側に 4 本の暗色の横帯があり、鰓蓋骨には 4 本の棘がある。このうち最も上方のものが大きく、カギ状に湾曲している。和名のアユカケはこの棘でアユを引っかけて食うということに由来していると言われている。

【分布の概要】

【県内の分布】

本曾川および矢作川下流域で確認されている。その生息量は極めて少なく、さらに年変動も著しい。最近では庄内川でも確認されている。

【国内の分布】

日本固有種。神奈川県・秋田県より南の本州および四国、九州に分布する。日本海側に多く見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟した親魚は晩秋に河口域沿岸部に降下して、そこで産卵・孵化し、体長 20mm に達した稚魚は河川を遡上する。ただし、カジカ稚魚のように群れて遡上することは少ない。若・成魚は河川の中流域の早瀬や平瀬の浮き石の下で生活し、主として水生昆虫や小型の魚類を食する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

本種は回遊魚であり、成魚の生活場所は中流域の早瀬の浮き石帯であり、産卵場所や稚魚の生活場所は河口・沿岸地域である。稚魚期に河口域から下流～中流域へ遡上活動が行なわれる。最近はその遡上道が十分に確保されていないことがあるために減少している。

【保全上の留意点】

本種は回遊魚であるために、沿岸から河川の中流域まで広い範囲を生活場所とする。河川改修や堰等の構築のため、遡上が十分に行われないことのないように配慮する。また、中流域での浮き石帯の確保に努める。

【特記事項】

環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類。

カジカの小卵型と同様に回遊魚であり、その生息場所は沿岸～中流域までの広域的であるため、分布に関する情報が少ない。

カワヒガイ *Sarcocheilichthys variegatus variegatus*

【選定理由】

大・中河川の中～下流域に分布するが、時よっての増減の幅が広く、イシガイ等に産卵するため、その条件もあって減少傾向にある。

【形態】

吻は丸くて口先は小さく、体側はやや金属性の光沢があり、灰色の地に小さな暗色の斑点が散在する。尾柄高は頭長の49%以上である。

【分布の概要】

【県内の分布】

木曾川・矢作川・豊川・庄内川水系の本流及びやや大きい支流に分布する。生息範囲は広い傾向がみられるが、時として群れて生息している。

【国内の分布】

豊川水系以西の濃尾平野、琵琶湖流入河川、さらに西日本に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

河川の中流～下流およびその支流に分布し、やや流れのある淀みやワンドに多く、5～6月にイシガイ等に産卵する。この時期の雄魚は追星が現われ、眼は赤く、鰓蓋はピンク色に変化する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県下を流れる大・中河川の本流や支流に分布するが、産卵を二枚貝に行うこともあって稚魚の出現量は年によって変動が大きく、出水や濁水等の河川環境の変化の影響を大きく受けている。特に、降雨に伴う一時的な出水によって土砂が流失するなど、河床が大きく変動する場合には、その影響は大きい。

【保全上の留意点】

カワヒガイは、二枚貝の生息がないと繁殖がみられない。イシガイ等の二枚貝の生息が継続されるためには、河床が砂や泥で形成された淀みやワンドが極めて大切であり、これらの形成・維持に努める。

【特記事項】

環境省レッドリストの準絶滅危惧。

ヤリタナゴ *Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel)

【選定理由】

平野部の細流や用水に生息が多く見られたが、産卵母貝であるマツカサガイ等の減少に伴い、減少傾向が著しい。

【形態】

側線は完全で、背鰭の条間膜に鰭条に平行に紡錘形の暗色斑がある。産卵期の雄では、吻端に追星が左右に分かれて出現し、体の前半部は赤紅色を帯び、腹面は黒色を呈する。

【分布の概要】

【県内の分布】

木曾川、豊川および庄内川の本流および支流に分布する。

【国内の分布】

北海道と南九州地方を除いて全国的に広く分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

流れの緩やかな平野部を流れる用水等に生息し、ユスリカ等の小型の昆虫や藻類を食し、産卵は二枚貝（マツカサガイ等）である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

大・中河川の本流にも生息するが、平野部のあまり流れのない用水や細流に生息する。産卵は二枚貝に行うことにも関連して、その生息場所が減少している。近年は外来魚（ブルーギル、オオクチバス等）の生息の影響も加味されている。

【保全上の留意点】

本種の生息する場所は、比較的人々の生活している場所に近い。そのため、本種の生息している平野部の用水路や細流は河川工事等が多く、その影響を受けている。さらに、家庭用雑排水の流入もあって水質悪化が進んでいる。この場合、まず貝の生息出来る環境を維持することが必要である。

【特記事項】

環境省レッドリストの準絶滅危惧。

スジシマドジョウ小型種東海型 *Cobitis taenia striata* Ikeda

【選定理由】

現在までに知られている分布域の一部において生息環境が悪化したり消失したりして、その個体数が著しく減少している。特に分類上同定に混乱が見られ、情報が交錯している。

【形態】

スジシマドジョウは大型種（全長 8～9cm）、中型種（全長 7～8cm）、そして小型種（5～6cm）の3つに大別され、小型種はさらに6つの地方型に分けられる。本種（東海型）はそのうちのひとつで、ずんぐりして、胸ビレから腹ビレまでの筋節数は11～13である。

【分布の概要】

【県内の分布】

庄内川および豊川水系の上・中流域の支流や細流を中心に分布する。その分布域は限定され、個体数も多くない。

【国内の分布】

三重県宮川から静岡県太田川までの東海地方に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

大・中河川の本流には少なく、平野部の小川や用水路に生息する。特に河床が泥質の場所を好み、雑食性である。付近の水田や沼にも入り、そこで繁殖する。農業用水路で底が砂・泥で構成され、水田等と連続している場所では数尾～数十尾の稚魚（体長 15～20mm）が同地点（5m 以内）で確認されることがある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

平野部の支流や用水路で生息がみられる。この場合、大きな出水がなく、水田との連続性が維持され、底が泥や砂である場所に限定されている。最近は圃場整備や河川改修等による水路の分断や生息地の破壊、さらに消失によって生息量が減少している。

【保全上の留意点】

細流・支流や用水路と水田や沼との一連の水系が保持されることが必要である。その場合、砂や泥の堆積した部分が存在し、出水等で河床形態があまり変動しない場所を残しておく配慮が求められる。

【特記事項】

小型種東海型は環境省レッドリストの絶滅危惧 I B類、大型種は絶滅危惧 I B類とされている。これらについては、従来からの情報も含めて整理する必要がある。

アカザ *Liobagrus reini* Hilgendorf**【選定理由】**

現在までに知られている分布域の一部で、生息条件が明らかに悪化しており、個体数が減少しつつある。河川中・上流域における周辺からの土砂の流入等による生息環境の悪化の影響を大きく受けている。

【形態】

体色は暗赤色～明るい赤褐色を呈する。体長は 15cm 以下で、尾鰭の後縁はやや丸みを帯びる。産卵期には、雄は頭上部から尾鰭にかけて盛り上がり、やや黒ずむものが多い。

【分布の概要】**【県内の分布】**

木曾川・矢作川・豊川の各水系の中・上流域およびその支流のやや流れの速い瀬に生息が確認されている。生息量は年変動が著しく、特に繁殖期は梅雨期～夏期にかけてであり、水位等の環境条件による影響が大きい。

【国内の分布】

日本固有種。秋田・宮城県以南の本州、四国、九州に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

河川の上流域～中流域の平瀬および早瀬に生息し、特に頭大の浮き石の下に多い。稚魚は 7～8 月に出現し、平瀬の岸近くの小石や砂利の水深 5～10cm の場所に集まって生活する。餌料は動物性である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

河川の中流域の平瀬や早瀬で、石をのけると時々アカザがみられる。浮き石の下や礫底の深いところにもぐり込むといわれているが、最近では石と石の間に砂利や砂が入り込んで浮き石が減少し、生活場所が少なくなっているようである。

【保全上の留意点】

平瀬や早瀬に浮き石が多く存在し、しかも餌生物である水生昆虫が多く生息する条件を満たすように配慮する。特に、河川周辺からの河川内への土砂の流入を防ぐことも考える必要がある。

【特記事項】

環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類。

メダカ *Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

現在までに知られている分布域の一部で、生息条件が明らかに悪化しており、個体数が減少しつつある。平野地域での小川や細流の整備による水系の不連続等による影響を大きく受けている。

【形態】

体長は4cm以下で、体色は淡い黄色味を帯びた灰褐色を呈する。側線は不明で、ヒゲを欠く。尾鰭が角張っている点でカダヤシと区別できる。

【分布の概要】**【県内の分布】**

県内全域に広く分布し、細流や用水に多いが木曾川水系等では本流にも点々と生息している。しかし、生息量は多くなく、生息状況には年変動が大きく不明な点が多い。

【国内の分布】

本州以南、琉球列島まで分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

平野部の池や湖、水田、大・中河川の下流域の淀み等に生息し、塩分に対する耐性も強い。食性は雑食性であり、上流から流れてくるものを摂る。産卵は春～秋にかけて行われ、受精された卵はしばらくの間、雌の腹部に付着した状態である。5～6月に孵化したものは、夏には成熟し産卵する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

大・中河川の支流や用水路等に広く分布するが、その生息量は減少しており、数十尾という大群はほとんどみられない。100m区間に数尾という状況が多い。水田や用水路、さらに小川が改修され、水路の断絶に関連して生息場所が減少していることや、同所に生息するカダヤシ等の外来魚がメダカの卵や仔・稚魚を食すること等による影響が大きい。

【保全上の留意点】

水田、用水路、小川等の水域の連続性に配慮し、水草が茂る水深20～50cmの淀みを積極的に配置する。また、カダヤシやブルーギル、オオクチバス（ブラックバス）等の外来魚の移入には注意を払う。

【特記事項】

環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類。

ドンコ *Odontobutis obscura* (Temminck et Schlegel)

【選定理由】

現在までに知られている分布域の一部において生息条件が悪化したり消失したりして、その個体数が著しく減少している。移動範囲が限られており、生息場所の消失により容易に減少する傾向がみられる。

【形態】

体長 25cm にも達する大型のハゼ科魚類。体はずんぐりしていて、頭部はやや縦扁し、尾部は側扁する。体色は暗褐色で、黒色の斑紋がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、豊田市、春日井市および音羽町等の小河川や用水路に分布する。時には庄内川の様な大河川にも出現する。

【国内の分布】

日本固有種。岐阜県・新潟県以西の本州、四国、九州に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

中・小河川の中流域の流れの緩やかな淀みやヨシ帯の発達した場所にすみ、特に砂や泥の河床を好む。成魚は川岸のヨシ帯に 1.0～2.0m に 1 尾ずつ、間隔をもって生息している。食性は小魚等の水生動物であり、生きたものしか食わない。昼間は岩陰や草、倒木の陰に隠れていて、主として夜活動する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

水がきれい、水量も多い小河川のヨシ帯や物陰に生息がみられるが、本種は稚魚期から成魚期にかけての一生の間あまり移動せず、その分布は極めて局所的である。時には稚魚がまとまって採捕されることもある。産卵は 5～7 月に石の下に行われ、孵化した稚魚は水辺の隙間や草の下の砂や泥底で生活する。河川改修等による護岸整備が進み、コンクリート護岸では生息場所がなくなり、姿を消す。

【保全上の留意点】

河川改修や用水路改修の場合に、岸辺のヨシ帯や隠れ場となる河床の石等が消失しないように配慮する。稚魚は、周辺の河床が砂や泥の浅い淀みで生活するため、改修するときには河道が単一化された状態にならないように留意する。

【特記事項】

行動が鈍いため、人によって簡単に捕獲されるため注意を要する。

淡水魚類 <コイ目 コイ科>

愛知県：情報不足

(国：準絶滅危惧)

OSTEICHTHYES <CYPRINIFORMES CYPRINIDAE>

AICHI：DD

(JAPAN：NT)

アブラボテ *Tanakia limbata* (Temminck et Schlegel)

【選定理由】

濃尾平野に生息すると言われているが、県内で採捕確認された情報は得られていない。近隣の岐阜県では、かなりの生息がみられている。今後もその情報の収集に努力する。

【形態】

側線は完全であり、幼魚の頃から体が黒ずんでみえる。

【分布の概要】

【県内の分布】

不明（情報不足）

【国内の分布】

濃尾平野以西の本州、淡路島、四国の瀬戸内海側、九州に分布。

【生息地の環境 / 生態的特性】

中・小河川及び用水等に生息し、雑食性であり、ドブガイやマツカサガイに産卵する。

【特記事項】

環境省レッドリストの準絶滅危惧。

